平野秀吉旧蔵の良寛遺墨「幾天見礼波」について

槇田善衛

一　はじめに

私は、二〇二一（令和四）年七月二十日発行の『まきの木』第一一六号に「平野秀吉旧蔵品とその目録について」と題する小論を寄稿した[1]。平野秀吉旧蔵品は、二〇二一（令和三）年十一月四日、新潟市巻郷土資料館に搬入され、寄贈手続きを終えた。そのため、平野秀吉旧蔵品の寄贈目録を作成し、一般に公開する準備に取り掛かる必要に迫られた。旧蔵品は「書籍七点、火鉢一点、勲章一点、硯等一点、印章六点、木箱三点、写真帳一点、短歌一点、色紙二点、用紙一点、封筒（メモ）一点、笏一点、琴（八雲琴）一点、掛軸八点の合計三十五点」であり、その詳細は「平野秀吉旧蔵品とその目録について」の寄贈目録のとおりである[2]。寄贈品はいずれも平野秀吉の人物史を知る手がかりとなる重要な資料であるが、平野秀吉の最後の著書が『良寛と萬葉集』であることから[3]、本編は良寛の書（掛軸）について取り上げることにした。取り上げる資料として、「平野秀吉旧蔵品とその目録について」の寄贈目録にある、資料名「良寛上人短歌」、番号「二八」、種別「掛軸」、備考「来丁見礼…、浅田壮太郎より受く。[4]」である[5]。

本研究では、この資料名「良寛上人短歌」に注目し、寄贈関係者の証言に基づき「来丁見礼…、浅田壮太郎より受く。」の検証を含め、良寛の書の概要、由緒、入手の経緯を明らかにするとともに、「良寛上人短歌」の良寛遺墨研究上に位置づけることを目的とする。

二　資料名「良寛上人短歌」の概要

平野秀吉旧蔵品の資料名「良寛上人短歌」の寸法、釈文、読み仮名を明らかにするとともに、掛軸の概要を示す。

（1）寸法　単位は㎝。

外箱　（縦×横×高）　六六・五×九・〇×九・三

外箱は印籠式の桐箱（図1）。天板表面の左下に「良寛上人の短歌」（図2）の墨書がみられるが、裏面にはない（図3）。また外箱の横手正面側に「良寛」（図4）と墨書がある。

掛軸　表具（縦×横）　一二七・〇×五六・八

本紙（縦×横）　三四・〇×四四・一

（2）釈文（図5、図6）[6]

1　槇田善衛「平野秀吉旧蔵品とその目録について」、まきの木編集委員会『まきの木』第一一六号、巻郷土資料館友の会,2022,pp.12-19。

2　同1。

3　平野秀吉『良寛と萬葉集』文理書院,1947,216p。

4　二〇一九（令和元）年九月十三日（金）に、新潟市職員が寄贈品の概要を明らかにする目的で事前調査を行った際、親族や関係者から得られた情報を備考に記した。

5　前掲1,p.19。

6　釈文は筆者が付した。

幾天見礼波
和可布留散東
安礼爾計理爾
和毛萬可起毛於知
者能美之天
良寛

（3）読み仮名

きてみれば
わがふるさと（は）
あれにけりに
わもまがきもおち
ばのみして
良寛

このことから、備考の「来丁見礼…」は「幾天見礼…」の誤りであることが明らかとなった。そのため本編では、平野秀吉旧蔵の良寛の書を「幾天見礼波」として扱うことにする。

三　「幾天見礼波」の由緒

平野秀吉旧蔵品にある「幾天見礼波」（資料名「良寛上人短歌」）を、平野秀吉が入手した経緯について、平野秀吉のご親族から聞き取り調査を行った[7]。聞き取った内容をまとめると、次の四点に集約される。

（1）母きよ子[8]は「浅田某または浅野某から、おじいちゃん[9]が手に入れたものなので、本物だと思うよ」と私に話したことを記憶している。母から聞いた時期は、昭和五十年代前半[10]である。

（2）昭和五十年代前半に、古美術商（新潟県上越市）で良寛の書に詳しい小林久から「幾天見礼波」の掛軸を見てもらったことがある。彼は玄関から入り、障子戸を引き、顔を出すなり、「うーん、これはいい！」と発声。さらに「これは（良寛に）間違いない」と周囲に話した。

（3）「幾天見礼波」は、祖父平野秀吉が生きていたときに入手したものと断定できる。なぜなら、父は趣味人ではなく、浅田某または浅野某から良寛の書を求めるような人ではない。また求める必要もないと考えるからである。

（4）表装について、子ども心にもっと古かったような気がする。当時はあまり関心がなかったが、表装が新しく仕立て直されているような気がする。

四　浅田某または浅野某とは誰か

親族の証言にある「浅田某または浅野某」とは、「平野秀吉旧蔵品とその目録について」の備考に記されている「浅田壮太郎」であると考えられる。浅田壮太郎は著名な良寛研究家であり、一九六六（昭和

7　二〇二一（令和四）年八月七日（日）電話による聞き取り調査を行った。証言者は岩澤和子氏、一九三六（昭和十一）年生まれの八十六歳。氏は平野秀吉の子である平野不二夫と、きよ子の娘で、秀吉の孫に当たる。二〇二二（令和四）年八月二十九日（月）に掲載許可を得た。

8　平野秀吉の長男不二夫の妻。ちなみに平野秀吉の長男秀夫は夭折のため、不二夫が平野家を継承した。

9　おじいちゃんとは、平野秀吉を示す。

10　西暦一九七五年～一九八〇年。

四十一）年九月十五日発行の『良寛と万葉集』の補遺者でもあるからだ。

平野秀吉と浅田壮太郎の関係は意外に古い。浅田壮太郎の遺徳を偲んで編んだ『ゆめ』には、佐藤量八が記した「道を求めて　東京の二十年を中心に」があり[11]、平野秀吉と浅田壮太郎の関係が記されている。ちなみに、佐藤量八は、高田師範学校に入学した折、品田真吉と横山靜徳ともに浅田壮太郎を訪問しており、これが佐藤量八と浅田壮太郎の最初の接点である[12]。佐藤量八の履歴は「明治四十三年[13]小千谷市片貝町に生る。高田師範学校卒業後、昭和四十六年[14]三月赤坂小学校長を退任する迄教職に従事。雑誌「禅の友」に数年にわたり良寛に関する研究を発表。全国良寛会々員」とあり[15]、佐藤は浅田の同郷かつ同師範学校の十三歳後輩となる。

佐藤量八が記した平野秀吉と浅田壮太郎の関係を示す文章を、次に紹介する[16]。

恩師平野先生のこと

先生[17]の恩師に、国文学者の平野秀吉先生がある。平野先生は西蒲原の出身で、高田師範創立以来の教授[18]だった。バラの栽培、登山、短歌など多彩の趣味の持ち主だった。国学、漢籍ともに卓越した学識を持っておられ、中でも万葉集の全釈を生涯の仕事としていた。学校のシンボル的存在で、学生に畏敬されていた。

我々がお伺いしても、決して座布団を出してくださらない。まだ勉学中の身だから……というのである。厳しい反面、学生の世話もよくされていた。

若かった頃、辞書を一冊食べてしまった、という言い伝えがあった。内容を理解するたびに、一頁ずつ口中に呑みこんでしまった、という。それほど激しい勉強家であった。

平野先生は、先生[19]を在学中から嘱望していたが、二人の関係が特に深まったのは、平野先生が退官されてからのことである。先生[20]が東京へ出てきた頃である。平野先生には、婚期の遅れたお嬢さんがいて、以前から心を痛めていた。相談を受けた浅田先生は、本人を呼んで、心構えを指導したり、結婚の世話を、奥様と力を合わせてしてあげた。先生[21]夫婦の真剣な態度に感服したが、平野先生も、どんなに先生を頼りにしていたかが思われた。万葉集は平野先生の死後、多くの子弟の協力で出版された。

この記述に解説を加えたい。まずは、平野秀吉と浅田壮太郎の関係が深まった時期はいつ頃なのであろうか。二人の関係が深まったのは、「平野先生が退官されてから」の時期であり、さらに浅田「先生

11 佐藤量八「道を求めて　東京の二十年を中心に」、関広一『ゆめ―思いの道―』片貝町郷土資料研究会,1994,pp.44-66。
12 前掲11,p.44。
13 西暦一九一〇年。
14 西暦一九七一年。
15 太刀川吉右衛門『やせかまど（解説）』片貝郷土史料研究会,1986,奥付。
16 前掲11,p.61。（筆者罫線引）。
17 先生とは、浅田壮太郎を示す。
18 教授ではなく、教諭。
19 同17。
20 同17。
21 同17。

が東京へ出てきた頃」の時期である。「平野先生が退官」したのは、一九三四年（昭和九年）三月三十一日である[22]。一方、浅田「先生が東京へ出てきた」時期は、「一九三六（昭和十一年）であり、東京都赤坂区青山南町五―三七に居を移した」とある[23]。このことから、平野秀吉と浅田壮太郎の関係が深まった時期は、一九三六（昭和十一）年以後と推察される。

次に「平野先生には、婚期の遅れたお嬢さんがいて」とあるが、婚期の遅れたお嬢さんとは誰であろうか。『平野秀吉』の「晩年」によれば[24]、「七人の子のうち、長男秀夫は死亡したが、残りの六人はみなすくすくと育ち、（略）二女下枝が未亡人となり、孫を連れて帰って来てはいたが、他はそれぞれ配偶者にも恵まれ」とあることから、婚期の遅れたお嬢さんとは、二女下枝と推察される。ちなみに下枝は、和納村（現新潟市西蒲区）出身、東京高等師範学校卒の教師、長谷川三樹也（はせがわみきや）〔一八九〇（明治二十三）年五月十日～一九三一（昭和六）年二月十七日〕と結婚したが、三樹也は結核を患い、死去したため、二児を連れ平野秀吉宅に身を寄せていた[25]。その下枝に対して、結婚の世話をしたのが、浅田壮太郎夫妻であったと考えられる。

このことから、親族の証言に出てくる「浅田某または浅野某」は浅田壮太郎と考えてよい。浅田壮太郎は、高田師範学校における平野秀吉の教え子であり、平野の晩年を支えた関係者の一人と言ってよい。

五　平野秀吉が「幾天見礼波」を入手したのはいつか

平野秀吉は「幾天見礼波」を浅田壮太郎から手に入れたと考えてよい。浅田壮太郎から良寛の書を手に入れたとしたら、それではいつ頃なのであろうか。前述の「浅田某または浅野某とは誰か」で示したとおり、平野秀吉と浅田壮太郎の関係が深まるのは、一九三六（昭和十一）年以後であり、平野秀吉が亡くなる一九四七（昭和二十二）年五月二十七日まで続いたと考えるべきである。またご親族の証言にあるとおり「祖父平野秀吉が生きていたときに入手したものと断定できる」との証言を考慮に入れると、平野秀吉が浅田壮太郎から「幾天見礼波」を入手したのは、一九三六（昭和十一）年から一九四七（昭和二十二）の十一年の間となる。

六　「幾天見礼波」は良寛遺墨集に掲載されているのか

「きてみれば」の和歌は相馬御風が指摘しているとおり[26]、「此の歌を書いたのが甚だ多い」。そのため、「幾天見礼波」はいずれかの良寛遺墨集に掲載されている可能性があると筆者は考えた。『良寛遺墨遺跡集』の「解良・阿部・木村三家の良寛遺墨」で宮栄二は「今日までこれらの良寛遺墨の展観、或は遺墨集の刊行された例は少くないが、

22　槇田善衛「平野秀吉が作詞した新潟県立小千谷高等女学校の校歌と作曲者大和田愛羅と校長斎藤秀平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第十九号、越佐文人研究会,2016,p.163。

23　駒谷正雄・佐藤量八篇「雪庵居士　浅田壮太郎先生　年譜」、関広一『ゆめ―思いの道―』片貝町郷土資料研究会,1994,p.183。

24　小泉孝『巻町双書第十七集　平野秀吉』巻町役場,1921,p.21。

25　槇田善衛「平野秀吉と相馬御風の交流」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第十七号、越佐文人研究会,2014,p.47。

26　相馬御風編『良寛和尚遺墨集』春陽堂,1919,良寛遺墨集解説第二丁。

主なるものを挙げるならば次の如くである」と記している[27]。

宮が示した遺墨集を中心に、平野秀吉が浅田壮太郎から入手したと考える、一九三六（昭和十一）年以前から一九四七（昭和二十二）年までの間の遺墨集（図録）に、平野旧蔵品「幾天見礼波」が掲載されているかどうかを確認することにした。確認した遺墨集は次の七点。

（1）一九一八（大正七）年三月二十八日発行、小柳市造『良寛墨跡』良寛会。
（結果）掲載なし。

（2）一九一九（大正八）年八月二十日発行、相馬御風『良寛和尚遺墨集』春陽堂。
（結果）掲載なし。「幾天見礼者…」の掲載がある。平野旧蔵品が「波」であるのに対し、「者」である点が異なる。

（3）一九二〇（大正九）年十二月十八日発行、相馬御風『良寛和尚尺牘』春陽堂。
（結果）掲載なし。

（4）一九二八（昭和三）年十一月十五日発行、安田靫彦監『良寛遺墨集』第一書房。
（結果）掲載なし。「幾轉見禮者…」の掲載はある。平野旧蔵品が「天」であるのに対し、「轉」である点が異なる。

（5）一九三三（昭和八）年九月一日発行、原田勘平編『寛師遺墨』寛師遺墨展覧会。
（結果）掲載なし。

（6）一九三八（昭和十三）年六月十五日発行、藤本韶三編『良寛遺墨』アトリエ社。
（結果）掲載なし。

（7）一九四〇（昭和十五）年十二月十五日発行、木山幽篁堂ら『良寛和尚遺墨撰集展観図録』東京美術倶楽部。
（結果）掲載なし。「幾天見礼…」の掲載があるが、平野旧蔵品と字体が異なる。

これまで述べてきた七点の外に、さらにもう一点遺墨集を加えたい。それは『良寛墨跡大観』である。

（8）一九九三（平成五）年七月十日発行、加藤僖一ら『良寛墨蹟大観　第三巻　和歌篇㈠』中央公論美術出版。
（結果）掲載なし。「幾天見礼者…」（九八、短歌）、「起轉見礼者…」（九九、短歌）、「幾轉見礼者」（一〇〇、短歌）、「幾天美礼者…」（一一、短歌）、「幾轉見礼波…」（一二、短歌）の五点の掲載があるが、いずれも平野旧蔵品と字体が異なる。

これまで八点の遺墨集について、「幾天見礼波」の掲載の有無を確認したが、いずれも同一遺墨の掲載を確認することができなかった。そのため、現時点では、良寛の書「幾天見礼波」は未発表の遺墨である可能性が高いと推察される。

七　「幾天見礼波」の位置づけ

これまで述べてきたことを総括すると、平野秀吉旧蔵の良寛の書「幾

27　新潟県教育委員会『良寛遺墨遺跡集』生誕二百年記念良寛遺徳顕彰会,1957,pp.10-11。

天見礼波」について、次の三点にまとめることができる。

（1）平野秀吉は浅田壮太郎から「幾天見礼波」を入手した可能性が極めて高い。

（2）入手時期は、一九三六（昭和十一）年から一九四七（昭和二十二）年の間である。

（3）「幾天見礼波」は、八点の良寛遺墨集には掲載されておらず、また「幾天見礼波」が収まる桐箱に由緒などを記した墨書等がみられないことから、良寛研究者の目に触れることが少ない、未発表の良寛遺墨である可能性が高い。

本研究では、平野秀吉の教え子の一人が、良寛研究家浅田壮太郎であり、一九三六（昭和十一）年以後から二人の交流が深まったことを裏付ける証拠として、「幾天見礼波」を価値づけることができる。さらに本編による検証の結果から、「幾天見礼波」は浅田壮太郎以外の良寛研究者の目に触れていない、未発表の良寛遺墨である可能性が高いことが推察される。遺墨の真贋は今後の研究にゆだねるが、「幾天見礼波」は平野秀吉と浅田壮太郎の師弟の交流を裏付ける証拠であり、良寛遺墨「幾天見礼波」が平野秀吉に伝来したことをもって、良寛遺墨研究上に位置づけることができるといえる。

八　おわりに

本研究は平野秀吉旧蔵品が新潟市に寄贈されたことにより進展した。今後、平野秀吉を顕彰する展示等で良寛遺墨「幾天見礼波」が市民の皆さんの目に触れる機会が増え、郷土の偉人の顕彰に良寛の遺墨が一役買うことができると考えている。

平野秀吉と浅田壮太郎の年齢差について触れたい。平野は一八七三（明治六）年六月五日[28]、浅田は一八九七（明治三十）年十一月十五日[29]に生まれていることから、両者は二十四歳の年齢差がある。平野秀吉の長男秀夫（夭折）の誕生日が一八九九（明治三十二）年三月五日[30]であることを考慮すると、平野と浅田は親子程の年齢差といえる。このことが両者の関係にどのように影響を与えたのかについての検証は今後の研究にゆだねたい。

最後に、平野秀吉のご令孫岩澤和子氏には、良寛遺墨に関する貴重な証言をいただいた。新潟市巻郷土資料館には平野秀吉旧蔵品に関する資料提供をいただいた。さらに、明星大学教授の廣嶋龍太郎先生には懇切なる指導を頂くとともに、私の拙い文章を読み、ご教示を賜った。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

〈筆者・明星大学通信制大学院教育学研究科博士後期課程在学〉

28 前掲24,p.89。
29 同23。
30 前掲24,p.90。

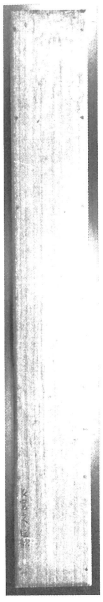

図１　外箱

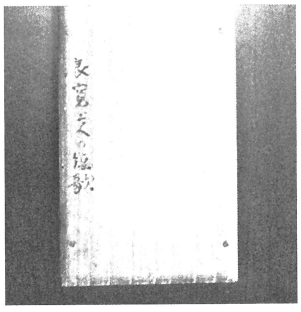

図２　外箱「良寛上人の短歌」墨書あり

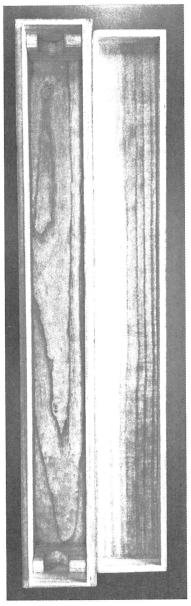

図３　外箱　墨書なし

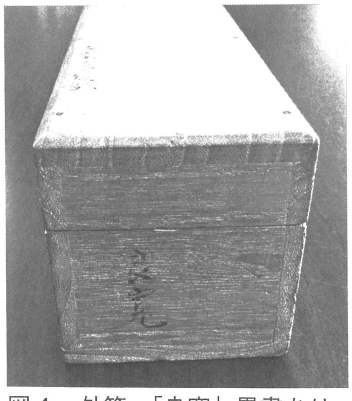

図４　外箱　「良寛」墨書あり

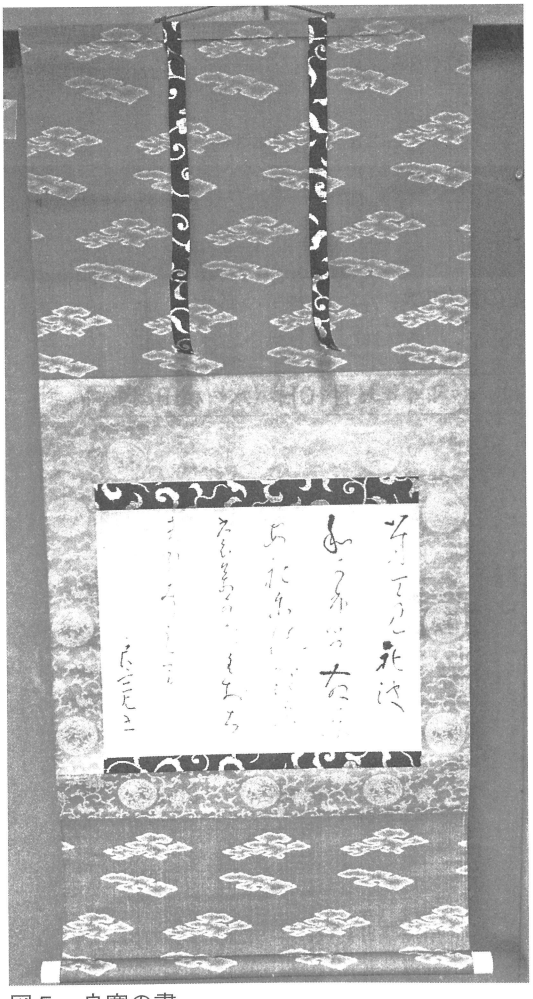

図５　良寛の書

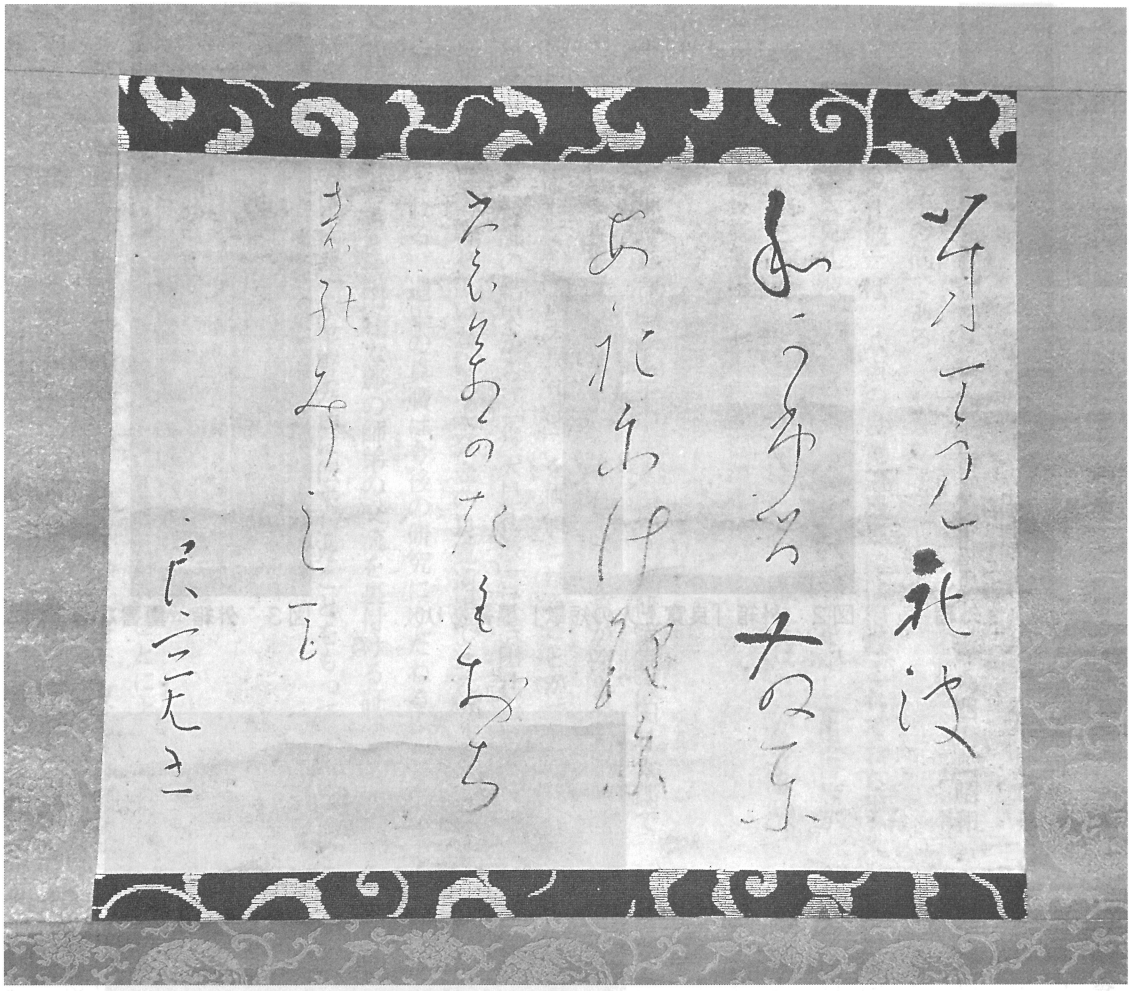

図６　良寛の書（拡大）

図１～６は、令和４年８月10日（水）槇田撮影。